



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「孫悟空が生まれた国」⑤

中国自由旅行一番乗りは、わが輩だ！

おそらく日本人として記録に残る中国ぶらり旅一番乗りは、わが輩に間違いない。

(知らんけど・・・)

1982年4月30日わが輩は、広州駅に着いた。広州駅は意外と清潔であった。なるほどゴミは見当たらず、貧困のイメージからは遠かった。

ところで国境の話にもどそう。わが輩から遅れること4年後の1986年に中川隆さんが中国に入った。中川さんは旅好きな高校の担任教師の影響を受けて、世界各地、特にアジアを中心に旅してきた。彼の旅の特徴は物見遊山ではなく現地の人と仲良くなることである。韓国やフィリピンなどで出会った人と未だに家族ぐるみの交流している。

『地球の歩き方 中国編』を片手に、中川さんは香港に飛んだ。彼の印象を抜粋してみた。

○香港の印象

「6.4天安門事件前だし、香港人にあちこちで助けてもらったこと、覚えています」

○香港/羅湖(ラーウー)の印象

「新開だろうか田園地帯にポツンポツンとビルというよりは、アパートが建っている。こうしてみると、香港全体は思っていたより広く、しかも高層ビルが密集しているのは九龍、香港島の海に面しているところだけなのが良くわかる」

○国境の印象

「香港側国境駅に着いた。まず中国側駅に行く人の多さに驚いた。自動改札口を通り、香港側出国検査を終え、少し歩いていくと、前方に中国側国境駅が現れた。赤色の中国風の建物が堂々と構えている。そこに行くまでに小川を渡るのだが、小川に沿って有刺鉄線がずっと張り巡らせているので、あれが国境線だろう」

「制服姿の中国人の係員が立っていて、香港側とは様子がガラッと変わる。華僑を除くわれら外国人は、最初健康診断書にいろいろ記入して、次に入国検査があった。無事入れて、その次は税関だ。申請書にはトラベラーズ・チェックは記入しなくても良いとのこと、現金16,000円とあと少しだけ記入した。それとカメラと腕時計も記入しなければならない」

○羅湖/広州の車中の印象

「(国境周辺には)高層ビルがたくさん建てられていた。発車時間がくるまでホームには入れないので、列車ごとに決まっている待合室で待った。15時30分発の列車に乗って、広州に向かった。途中、停車駅は1つだけだった。車窓からは赤茶色の大地と煉瓦の家が所々に見えて、向こうのほうには低い山々と、日本に比べると変化が乏しいように見える。田んぼにはたくさんの人が手作業をしていたが、車などの機械類はない。車掌は各車両に1人ずついて、ここの女性の車掌さんはモップで床を拭き、茶を配り、時刻表の販売、掃除と忙しい。また、いろんな弁当も売りに来たが、買わなかった」

○広州駅の印象

「広州に着いたとき、6時を過ぎていた。駅前にはたくさんのおばさんが、観光客相手に地図や時刻表などを売っていた。中国人はみんな英語がわからないので苦労する。バスは古くて汚いうえ、ものすごい人が乗ってくる」

わが輩が中国国境を越えた1982年とほぼ印象は変わっていない。ところが、今日の中国はどうか。金力と人力と覇権主義を振りかざして世界を脅かしている。国内でも1989年の天安門事件、2021年1月6日香港民主派53人逮捕など、傍若無人の振舞いである。一方で共産党幹部(頼小民会長)は、なんと285億円の賄賂を受け取っていた。どこに共産主義の信義はあるのか。あるのは途方もない欲望だけだ。

わが輩が初めてインドに行ったときの世話人は、K太郎さんであった。ボンベイの高級住宅街パーリー・ヒルのマンションに住んでいた。わが輩はそこにパラサイトして、インド各地でヒッピー生活をしていたのである。彼は都島工業高校/関西大学/ダイハツを経てパキスタン、インドでタイヤの技術指導をしていた。戦時中は中国に従軍していた。その体験から「中国人の体質からして共産主義はうそっぱちや」と話していた。

「大魔王ちゃん。中国の金持ちの服の両脇が割れている意味を知ってるか？」

わが輩は分からなかった。

「あれはなあ。円卓の下に遊女たちを忍ばせて、昼夜を問わず酒食を食うためや」

中国奇譚からの受け売りだと思うが、究極の金銭欲と食欲と性欲を同時に食るのが中国人だと言いたかったのであろう。だから中国五千年の歴史を、物量的平等をめざす“共産主義”でひっくり返すことなどできるわけがないと。

インドの聖人は「金と女」に惑わされないように誡めている。だから守銭奴としてマルワーリー(商業集団)をやり玉にあげることもあった。『カーマ・スートラ』なる性典があるが、性教育の側面をもつ。食についてはどうか。アーユルヴェーダ聖典のように、制欲あるいは食養が重要視される。

そもそも性欲を発動しながら、カレーを食いつけるインド人なんて存在したかい？

いるわけないよ！